

「かける」 by 多和田葉子

『かける』

枕にカヴァーをかけ、ブラウスにアイロンをかけ、掃除機をかけ、洗濯機をかける主婦の仕事にはあまり縁のないわたしでも、朝食のトマトには塩をかけ、原稿を書くためにめがねをかけ、椅子に腰をかける。昼になれば鍋を火にかけてカレーを温め、それを御飯にかけて食べ、満腹すると眠くなって、書ける！と思っていた原稿の続き書けなくなって、意識の扉に鍵をかけ、ラジオをかけたまま、ふとんをかけて寝てしまう。このまま静かにしていれば誰の邪気にもならないけれど、本当はもっと他人に迷惑をかける方がいいのかもしれない、という気がしてくる。迷惑だって人にかける橋なのだから自閉的になるよりはまし。従順な人を畏にかけたい、博識を鼻にかけたい、賭け事がしたい、そういう悪いことばかりして、縄をかけられ、道徳という裁判にかけられ、そうなったら尻に帆かけて逃げる。日が暮れかけた頃に目が醒めて、かけそばを食べる。どんなに保険をかけても、いつかは死んでしまうのだから、面白いことは今のうちにやっておこう。たとえば、文学。言葉に磨きをかけ、人に声をかけ、謎をかけ、催眠術をかける。鳥が巣をかけるように、わたしの中に巣食った掛け言葉の習慣が、話の筋を勝手に決めてしまう。声を掛け合っても犯罪は防げない。それよりも、猫と犬をかけあわせて混血文化を促進し、楽天主義にエンジンをかけ、時間をかけて物語という布地にミシンをかけたほうがいい。七に七をかけて三で割る夢の中ではいつも橋を渡りかけてやめる。川の向こう岸には売店がある。その売店で、言いかけてやめた言葉を駄菓子といっしょに売っている。日が暮れかけると、空から馬のようなものが駆けてくる。月が欠ける。その月をかじった歯が欠ける。茶碗の縁が欠けるように。ひとり欠けるともう一人芝居はできない。